

國語創造

復刻版
全2巻
別冊1

戦後の国語教育の先駆誌。

戦後初期に推進された民主的な国語教育の

状況を伝える貴重な文献資料。



志垣寛主宰「昭和21年11月↓昭和24年1月刊」

梶村光郎監修・解説



緑蔭書房刊





國語學習新論

志垣寬

國語學習上是非一通り考へて置かなければならぬ問題は、言葉にも階級性があるといふことである。たとへば自分といふ一人稱についても上は朕から下はやつがれといふことばに至るまで、いろいろなひ表はし方があり、それが夫々階級性をもつて居る。朕が天皇以外のものには用ひられない如く、その他の言葉も亦、その所屬階級に限つて使はるゝ。封建制度のきびかつた時代には、言葉さへ自由に使ふことは出来なかつた。下男は主人に對して「我輩が行つてくる」などいふ言葉は使へず、商人は客に對して「てまへどもでは……」といはなくては繁昌しなかつたであらう。民主的な社會ではさういふ事は珍らしいであらう。日本の社會から、だんだん特權階級が減びて、階級性がうすらいで行くにつれ、言葉もまただんだん民主化し、今日では大抵は君僕で行けるし、「私」ならばどこにでも通用するやうになつたが、それでもまだまだ多くの封建性を殘してゐる。

封建時代にさかのぼつてみればこのことは一層よくわかる。公卿階級の言葉と庶民階級の言葉と、大凡三通りのものがあつたことをすぐ吾々は發見する事が出来る。麿は公卿、それがしは武士、てまへは商人といつた類である。

言葉をかき表はす文字にこの階級性がくつついてゐるのも亦當然なことである。漢字が武家以上の専有文字であり、假名が平民大衆の文字であつたことはいふまでもない。女は假名でかき男は漢字でかいたことも顯著な事實で、今日も尙この傾向は殘つてゐる。相當の教養をつんだ者でも日本室の床の掛軸の文字などは讀み得ないものが多い。

文學についていへばこの階級性は一層はつきりする。和歌は公卿の文學であり、漢詩は武家、俳句や川柳は平民の文學であつた。文字や文章の上に表はれたこの種の階級性をなくする事、つまり國語を民主化することが、國語學習上の一つの大きな仕事

梶村光郎

▼琉球大学助教授

『國語創造』の内容と復刻の意義

「國語創造」は、志垣寛を主宰者にして、戦後いち早く発行された國語教育雑誌である。教育新聞社を発行元にして、一九四六(昭和二一)年一月から一九四九年一月までの約二年間に一三号発行された。それは、「用紙ききん」による雑誌の不定期刊行や合併号、さらに小型の誌型への変更も余儀なくされた上での発行であった。

本誌は、「今までの民族精神に片寄った形而上学的國語論、ことだま精神に憑かれたトーテムズムを清算して、平明、確実、真に民衆の力となれる國語の創造」(寒川道夫)をめざしたものであり、戦後初期に推進された民主的な國語教育の状況を伝える貴重な文献資料である。誌面には、戦前に民間教育運動に関係していた人物が多く執筆者として登場しており、國語教育運動の主体の組織化という点で注目される。それらの人物は、波多野完治、栗原一登、野村芳兵衛、寒川とみ子、城戸幡太郎、鈴木道太、近藤益雄、国分一太郎、峰地光重、遠藤典男、平野婦美子、吉田瑞穂、山下清三、稲村謙一、稲垣寿年、佐藤茂、東井義雄、上原猛、小山玄夫、クロタキチカラ、今井誉次郎などである。

また内容面では、國語教室の経営、國語国字、國語読本、生活教育、生活綴方、生活指導、児童文化、各地のサークルの動きなどの問題が取り上げられているが、戦前の教育遺産の継承という点からも注目される。特に生活綴方の復興が、近藤益雄、志垣、寒川らによって叫ばれる。「山芋」所収の詩の紹介など生活綴方関係の論稿が数多く掲載されていることは、生活綴方教育史の研究において見過ごせないであろう。

克に待望の史料。



寒川道夫

[本誌『國語創造』の実質的な編集責任者]

本誌の主な内容一覧

第1号

- 国語学習新論「志垣寛」
- 国語の心理(一)「波多野完治」
- 新しい国語教育のために(一)「石森延男」
- 児童文化の新方向「寒川道夫」
- (座談会)新しい読本教材を検討する
- (座談会)児童文合評
- 新編次郎物語(一)「寒川とみ子」

第2号

- 民主主義の建設と國語教育「城戸幡太郎」
- 国語の心理(二)「波多野完治」
- 生活教育論(一)「鈴木道太」
- 綴方復興「近藤益雄」
- (座談会)新読本教材を語り合う
- (座談会)児童詩研究
- 新しい国語教育のために(二)「石森延男」
- 新編次郎物語(二)「寒川とみ子」

第3号

- 言語に関する基本的人権「国分一太郎」
- 國語教育の基礎的技術面「今井文男」

人権としての言語への豊かな芽

「國語創造」が世に問われたのは、一九四六年から四九年、いわゆる戦後新教育、百花繚乱の時代です。中でも花形は、何といっても社会科学という新設教科をめぐる多様な試みで、官民の間で活発にすすめられました。その中で「國語創造」は、学校の教育内容の中核、言語教育にこだわって、戦前戦中以来、より人間らしさを求める教育、教師の伝統を、新しい戦後社会の教育創造につなぐ、きわめて注目すべき運動誌だと私は考えます。

戦中の「ことだま論」を打破して、言語道具論へという評価もあるようです。しかし、編集部に求めてどいたいくつかの文章に目を通すうちに、古くてかつ新しい言語観、人権としての言語への豊かな芽がそちこちにみられ、新鮮な驚きを感じました。その事実は、主として戦前からの、言語を人の生きよう(生活||人権)につなげて考える生活綴方の伝統をひく論者の中にもみられるものです。

大上段に「言語に関する基本的人権」を論じた國分一太郎の文章を例にあげなくとも、野村芳兵衛、近藤益雄、さがわみちおらの、やわらかい実践記録そのものの中からにじみ出てくるものもそれです。

「國語科の使命は、本当に生活がわかり、味え、そして友達にも語れ、友達の考えや氣持もきけるようになること」「國語を「言語」とおきかえると、言語こそが人を人としてあらしめるもの、という考えが、やさしい言葉で語られています。加えて、「本を読むとは、生活を讀む」「自分の心を讀む」「友達の心を讀む(野村芳兵衛) こと、つまり文字づら、言語のひとりあるき、物神化へのいましめにまで及んでいきます。言語教材は、「子供たちの中からこそ生れる。」「言語は……個性と社会性の問題(さがわみちお)という表現も、ひびき合うように、読まれます。

いまなお新鮮、私たちの共有財産として貴重です。

研究史。戦後の国語教育史研究

「戯曲」聖職(鈴木道太)

(座談会)今までの児童詩とこれからの児童詩

新編次郎物語(3)「寒川とみ子」

第4号

【特集】前期用国語読本の解説

第5号

国語・国字の能率化(1)「上野陽一」

国語教育の反省とその進路(鈴木弘道)

新国語教育の精神(峰地光重)

「カマラード(同志)を生きる」宮城県に於ける教育文化運動の胎動(遠藤典男)

児童詩の研究(上村健次郎)

国字国語教育の思い出(平野婦美子)

第6号

国語・国字の能率化(2)「上野陽一」

生活教育論(2)「鈴木道太」

表現指導から見た新しい国語読本(吉田瑞穂)

国語学習のあり方(山下清三)

新編次郎物語(4)「寒川とみ子」

第7号

新読本の思想(さがわみちお)

新国語論(石森延男)

過渡期の苦悶(近藤益雄)

(国語随筆)草木の名まえ(金田一春彦)

新編次郎物語(5)「寒川とみ子」

第8号

【特集】綴り方指導研究

綴り復興(志垣寛)

作文教材とその指導(原豊一郎)

中学の作文(試案)(稲垣寿年)

絵日記を中心とした低学年の表現指導(林久雄)

私の児童詩教室(1)「佐藤茂」

村の作文指導(東井義雄/大石喜代志)

新編次郎物語(6)「寒川とみ子」

戦後国語教育誌の先駆け

このたび、「国語創造」誌(一三冊)が復刻される運びになった。大きい喜びである。私共が編成した、「国語教育史資料」第六巻「年表」(昭和五六年四月、東京法令刊)に、昭和二十一年、「国語創造」(志垣寛主宰)創刊」と記してあるが、その時点でも、私自身は、「国語創造」誌の現物を手にとって見る機会には恵まれていなかった。それだけ、今回の復刻は、国語教育の研究・実践に取り組んできた者にとって、大きい福音と思わずにはいられない。

太平洋戦争終結(敗戦)後、「赤とんぼ」・「銀河」など、児童誌が続々と創刊されたが、「実践国語」誌(飛田多喜雄編集)の創刊は、昭和二十四年四月であった。「国語創造」誌は、それよりも早く創刊され、他誌に先駆けて、すぐれた執筆陣に恵まれ、思潮、理論、実践、実態と、多角的に、提言、考究、解説、報告など、内容豊かに編集され、戦後の国語教育界に、清新の気をみなぎらせた。

二〇名をこえる執筆者のうち、私は九名の方々には、後年、面識を得、直接ご交誼・ご教示をいただくことができ、他の六名の方々には、著者を通して啓発を受けることができた。

今は一日も早く、復刻される「国語創造」誌に接し、多くのものを摂取し、戦後国語教育史研究に十分に活用していきたいと思うばかりである。

私はかつて、昭和一〇年代の国語教育学会機関誌「国語教育」誌(昭和一三年〜昭和一六年、四巻計四四冊、岩波書店発売)のバックナンバーを一括購入することができ、全一冊に製本して、研究に活用した時の喜びを忘れることができない。「国語創造」誌の復刻を待つ今も、寒川道夫・石森延男・波多野完治・峰地光重等、諸氏の温顔がなつかしく浮かんでくる。

久ぶりにもたらされた、うれしい知らせに感謝しつつ、「国語創造」誌復刻版が、広く読まれ、十分に活用されるよう願ってやまない。

戦後最初の国語教

第9号

国語創造講座(一)国語創造への道「クロタキ・マコト」
村の子の綴る生活報告「小山広夫」
私の児童詩教室(二)「佐藤茂」
児童詩の歩み「横山克」
国語読本の詩の見方と発展的指導「吉田瑞穂」
カマラードの生活教育討議会報告「遠藤典男」

第10号

特集 児童演劇研究
国語創造講座(二)国字問題の歴史「クロタキ・チカラ」
児童演劇研究
演劇精神について「村山知義」
学校劇運動について「宮津博」
学校劇論「菱沼太郎」
生活劇の新しい道「横山克」
劇教材を考える「岡田一忠」
人形芝居の指導記録「大槻一夫」

第11号

特集 学校新聞指導
国語創造講座(三)国語改良の努力「クロタキ・チカラ」
生活教育論の系譜「鈴木道太」
学校新聞研究「山下清三他」
どん百姓の詩「天関松三郎」
教育委員会法について「天城勲」

第12号

国語創造講座(四)「文字の国」の動きを見る「クロタキ・チカラ」
夏休生活指導の報告「室谷幸吉・中村万三・小山玄夫」
児童詩の芽を育てた記録(一)「あずさなるみ」
児童作品集

第13号

特集 国語学習の作業化
研究記録集 国語学習効果の判定
新編次郎物語(一)「寒川とみ子」

國語創造

復刻版
全2巻
別冊1



志垣寛主宰「教育新聞社(教新社)発行」
一九四六年一月創刊〜一九四九年一月刊[全13冊]
梶村光郎監修・解説

第1巻〈1号(昭和21年11月)〜7号(昭和22年12月)全7冊〉
第2巻〈8号(昭和23年1月)〜13号(昭和24年1月)全6冊〉
別冊〈解説十総目次十著者名索引十収録児童作品一覽〉
A5判・上製クロス装・総約9200頁
定価11本体価格36000円十税

[99年9月刊]

ISBN4-89774-504-7 C3030 ¥36000E

『国語創造』関係年表

- 1945 名古屋国語研究会結成(寒川道夫・稻垣寿年等)
 - 12 『教育新聞』創刊
 - 1946 4 『赤とんぼ』(児童誌)創刊
 - 5 『国語創造』創刊
 - 7 『明るい学校』(民主主義教育研究会編)創刊
 - 9 『生活学校』復刊
 - 1947 9 日本童詩教育連盟「童詩教育」発刊
 - 1948 2 『教育生活』創刊
 - 4 『教育』(世界評論社)復刊
 - 1949 4 『実践国語』復刊
 - 1950 7 日本綴方の会発足
 - 11 『作文研究』(日本綴方の会編)創刊
- [参考・国語教育史資料]第六巻(野地潤家編)

関連図書のご案内

戦前 教育科学運動史料

戦前の民間教育研究運動の最後の拠り所となつた教育科学研究会の機関誌『教育科学研究』と山下徳治編集の『教材と児童学研究』を収録した。総力戦体制下の民間教育運動の課題、状況を知る第一級の史料。待望の復刻である。

佐藤広美・高橋智編／解説

全2巻[編集復刻版]

本体価格32,000円[A5判・上製クロス装]

推薦II海老原治善・中内敏夫・波多野完治・山住正巳

資料 日本の戦後教育改革

本資料は『松本喜美子資料』の中核であるFELの実態資料と神奈川の新教育の実践資料を中心に編纂した。昭和20年代から30年代初めの戦後教育改革実施期における各種の解説書、報告書、会議記録など珠玉の史料満載。

佐藤広美編／解説

全5巻[編集復刻版]

本体価格100,000円[B5判・上製クロス装]

推薦II鈴木英一・高橋寛人・寺崎昌男・永野勝康

農村教育研究

本誌は大西伍一を中心に下中弥三郎、江渡伏嶺、土田杏村など多数の教育実践家が参加した農村教育研究会の「研究雑誌」である。當時の政治・教育思想を知るための不可欠の文献。なお、原本の所蔵機関はわずかで全巻揃いの所はない。

小林千枝子監修／解説

全3巻・別冊1[復刻版]

本体価格57,000円[A5判・上製クロス装]

推薦II中内敏夫・中野光

緑蔭書房

173-0004 東京都板橋区板橋1-13-1
電話03(3579)5444 振替00140-8-56567

特約店